

## 序にかえて

本書は、「チーム医療における専門医療職の自然発生的相互乗り入れの現状と将来展望」をテーマに、2011（平成23）年7月24日、NPO法人「地域の包括的な医療に関する研究会」が主催した市民公開講座の収録を再編したものである。

わが国におけるチーム医療の必然性は、もはや誰もが認めるところである。今や論点は、真に患者の生活の質（QOL）を担保するかたちで医療を提供していくには、「チーム医療をいかに充実させるか」「そのために多職種はいかに連携していくのがいいのか」に、完全に移行しているといっていだらう。

そんな中、「チーム医療の在り様を、従来の Multidisciplinary（多職種相互連携）型から Interdisciplinary（多職種相互乗り入れ）型へと成長させなければならぬ」とする主張が、リハビリテーション領域を中心に台頭し、最近では急性期医療の現場でも注目を集

めるようになった。本講座は、この考えをベースに展開したものである。

この、「多職種相互乗り入れ型のチーム医療」については本編で詳説するが、筆者らが、多種多様な医療スタッフによる「専門領域のそれぞれがお互いに連携する」から、領域を超えた「相互乗り入れ的に連携する」へと、一歩前進する考えをもつに至った背景として、当NPO法人について、少し説明しておこう。

現在、当法人の理事長を引き受けている筆者の専門は救急医学であるが、副理事長を務めておられる栗原正紀先生（長崎リハビリテーション病院理事長）は、リハビリテーション医学が専門である。7年ほど前になろうか、晩秋のある日、たまたま二人が同席した会合の後の酒席で、チーム医療の質を巡り話が盛り上がったことが、当法人発足のきっかけとなった。その話とは、ざっとこんな内容であった。

たとえば脳卒中で倒れ、駆け付けた救急救命士により救急搬送されてきた患者は、救命救急センターなり、専門病院の救急外来なりで治療を受けることになる。そこで治療を終えた患者は、その後も引き続き、時間の経過に従い、脳卒中病棟、回復期リハビリテー

シオン病棟などと、いくつかの医療現場で治療を受け、その上で在宅医療や施設入所のかたちで地域社会に戻っていくことになる。

この間には、行く先々の現場ごとにさまざまな職種がチームを組んで絡んでいくわけだが、そのすべての職種の一人ひとりが、この流れの全体像をイメージしつつ、自分の立ち位置をしっかりと認識していないことには、結局のところ患者の「生活」にはつながっていないだろう。また、患者サイド、つまり地域社会としてもその流れを理解し、そのための仕組みを構築していかないと、真に患者にとってよい医療が提供されているということにはならないだろう、と――。

このような問題意識から、医療人と医療の当事者である一般市民との間で現在の医療について共通理解を育んでいくためには、体系的に勉強会を構築したほうがいいだろうということになり、当NPO法人を立ち上げたわけである。以来、年に平均して2回、いくつかの地域において市民公開講座を開催し、今日に至っている。

本書で紹介するのは、その第16回講座である。この数年、さまざまなかたちで話題にの

ぼることの多いチーム医療ではあるが、その極めて本質的な問題として、「われわれ専門医療職はチームにおける自分の役割をどのように認識し、日々どのようなことを考えながら仕事をしているのか」を、より具体的なかたちで社会に発信していきたいと考え、企画したものである。

医療人はもとより、一般市民の方々にも医療現場をイメージしつつ読んでいただき、本来の意味でのチーム医療の在り様、とりわけ職種間での、お互いのポジションを尊重しながらも、ある局面では相互乗り入れをするという「手の結び方」について理解を深め、今後のチーム医療の可能性を展望していただけたら本望である。

NPO法人地域の包括的な医療に関する研究会 理事長

昭和大学病院 病院長

有賀 徹